

# 1 面接調査によるターミナル期患者の家族の思いを探る

○妙本 和枝（赤穂市民病院）

## I. はじめに

医療の進歩によりがん患者の長期生存が可能となり、患者とともに多くの課題に直面し、対処していかなければならない家族へのケアが注目されている。ターミナル期患者の家族は患者に何をし、あげたいと思うのか、看護師に何を求めるかなど、家族の思いに焦点を当てて調査した。

## II. 研究方法

1. 対象：2008年1月、全胃幽門輪温存臍頭十二指腸切除術（PPPD）を受け、その後化学療法を行い、予後告知を受けたターミナル期の67歳、男性患者（A氏）1名。妻は毎日付き添い、絶え間なく、A氏の患者の体をさすっていた。2009年12月永眠。
2. 調査方法：妻にインタビューガイドを用い、約50分間の面接調査を行った。また、看護師関わりに関する情報をA氏とその家族を支援した看護師から聞き取り調査を行った。  
質問内容：①A氏は妻にどのようになりたいと話せることがあるか。②A氏が看護師や主治医に直接言えないことで何か望むものがあるか。③A氏にしてあげたいことがあるか。④妻はA氏の状況をどのように捉えているか。⑤今後についてA氏とどのように話しているのか。
3. 倫理的配慮：平成21年度赤穂市民病院倫理委員会に申請し、実施の承認を受けた。

## III. 結果

2008年10月に気管切開を受け、あと3ヶ月という余命宣告を受ける。退院後、2人で自宅で頑張ると決意し、訪問看護を利用しながら在宅療養をしていた。しかし、1年後状態が悪くなり、本人も妻も病院での最後を覚悟で入院した。余命宣告されてすでに1年が経過していたが、本人も妻も今後のことに関しては互いに全く話していなかった。また、ケアの希望を妻から看護師に依頼すると、長期入院になっている為、嫌われ、嫌な顔されるのではないかと不安があったとのことであり、A氏から怒られた時には「自分が悪いんだ。もっと頑張らなければいけない」と思ったり、「至らない妻でごめんね」と涙を流すこともあった。周囲に「笑顔でおりよ」と言われても苦しんでいる夫を目の前にして笑ったりできず、「夫の死が近い」ことは理解しているが、不安・悲しみ・怒り・予期悲嘆などの様々な感情の中で生活していた。インタビュー後、妻は自分の思いを話したことで、親近感がわくようになってよかったと話された。

## IV. 結論

家族が患者にしてあげたいこと、看護師が求めることはともに『患者の安楽』である。患者自身の身体的苦痛の緩和が、家族の最も大きい精神的ケアとなる。家族は、患者にとっては自身を支えてくれる最も大切な存在は家族であり、看護師も患者の最大の支援者として見ている。しかし、家族は患者と療養生活を共にし、さまざまなストレスを受け、悩みや疲労も大きく、家族もケアを必要とする存在である。看護師は、患者や家族が大切にしている価値観や家族の歴史などを把握した上で、家族が望む関わり方をしていくことが重要である。日々の看護の中でどうしても患者中心となり、家族との会話の時間を十分に持てないのが現状である。家族への声かけを意識的に増やしていくことが、家族－看護師間のパートナーシップを築く基本となる。この気持ちを大切に、患者－家族が深く良き関わりを持った人々に「ありがとう」という別れのことばを告げられる、両者にとって望ましい最期を迎えられるよう援助していく必要がある。